

『豊臣政権における聚楽第の意味』

担当：京都市文化財保護課 馬瀬 智光

1 はじめに

聚楽第と伏見城、この二つは豊臣秀吉が京都市内に築いた城郭として特に有名です。二つの城以外にも、妙顕寺城、龍臥城、淀城などの城を秀吉は築いています。ここでは特に平安京の大内裏の故地に築かれた聚楽第が豊臣政権に果たした役割を、埋蔵文化財の調査成果と文献史料の見直しによって考えていきたい。

2 『駒井日記』に記述された聚楽第

- 駒井日記の作者は、豊臣秀吉のもとで天津奉行等になった人物で、豊臣秀次に付けられ右筆を務めている。文禄 4 年（1595）の秀次事件に連座することなく、秀吉に仕え、関ヶ原の合戦後に加賀藩の前田利長に仕えた駒井重勝（生年不詳～寛永 12 年（1635））である。
- 駒井日記で残っているのは、文禄 2 年 9 月～文禄 4 年 4 月の期間であるが、欠損部が多い。
- 駒井日記中、「聚楽」、「聚楽廻」、「聚楽堀」の表現で、聚楽第に関する記述が認められる。
- 「聚楽」：19 回、「聚楽廻」：1 回、「聚楽堀」：1 回の計 21 回記述されている。
- 聚楽第に関する内容
 - A. 聚楽第に向けた積荷に関する記述（1 回）
 - B. 死去した大名の後継者について太閤秀吉から関白秀次への指示（1 回）
 - C. 聚楽廻での家割に関する太閤秀吉からの指示（1 回）
 - D. 関白秀次が伏見城や外遊から帰還した時（8 回）
 - E. 太閤秀吉の使者が聚楽第に来た時（3 回）
 - F. 聚楽第での能の開催（3 回）
 - G. 大和中納言（豊臣秀保）の訪門と死去の知らせ（2 回）
 - H. 聚楽第の規模（1 回）
 - I. 聚楽堀の枯桜の処理（1 回）

以上から、関白である秀次が居城に帰還することが記述しなければならない項目であったことがわかるとともに、関白としての政務を司る場所である聚楽第に、太閤からの指示が来た場合に記述されることもわかる。また、能は単なる芸能ではなく、演目を舞うのは関白秀次、家康、利家など豊臣政権中枢に属する者であることから、政治交流の場として聚楽第が存在したこともわかる。

『駒井日記』で特に有名であるのが、文禄 4 年（1595）4 月 10 日条の記述である。

「聚楽本丸石垣之上壁之廻間數 一南之門より北之門迄 百八拾間 一北之門より西之門迄 貳百貳拾間 一西之門より南之門迄 八拾六間 一合四百八拾六間 但八町壹反切 右之外 一南之丸之廻百八拾四間 一北之丸之廻百九拾貳間 一西之丸之廻百三拾間 合五百六間○聚楽柵木通間數 一南二丸門より北之門迄四百五十間 一北之門より西之門迄三百五拾五間 一西之門より南之門迄貳百貳拾貳間 合千三拾壹間 但十七町壹反切五間」

上記の記述から、以下の規模と内容をもつことがわかる。

- 1) 聚楽第は、本丸、南二之丸、北之丸、西之丸が存在した。
- 2) 本丸は、南之門、北之門、西之門の 3 箇所に門をもつ。
- 3) 本丸南之門～北之門の石垣之上壁之廻間数：180 間
本丸北之門～西之門の石垣之上壁之廻間数：220 間
本丸西之門～南之門の石垣之上壁之廻間数：86 間
本丸の合計間数 486 間（1 間：6.5 尺 [1 尺＝約 30 cm]）＝約 948m
- 4) 南二之丸の石垣之上壁之廻間数：184 間＝約 359m
- 5) 北之丸の石垣之上壁之廻間数：192 間＝約 374m
- 6) 西之丸の石垣之上壁之廻間数：130 間＝約 253m

3 最近の調査事例

1) A 地点

調査日：2009 年 6 月 8 日

住所：上京区中立売通日暮東入新白水丸町 462-7 他、裏門通一条下る今新在家町 206-5 他

成果： 現地表下 0.8 m で砂礫の地山層に達する。聚楽第本丸北濠の南肩口が発見され、埋土は、南から北に傾斜するように堆積していた。北濠の南肩口は、敷地境界から南に約 5 m（南新在家町と今新在家町との町境から約 9 m）の位置で認められた。

2) B 地点

調査日：2009 年 4 月 13 日

住所：上京区下長者町通智恵光院東入西辰巳町 111

成果： 聚楽第本丸南濠を現代盛土直下で確認した。敷地の南北方向に 3 箇所の調査区を設定したが、いずれの調査区でも濠埋土を検出した。敷地南端に設定した 1 Tr では堀埋土は 7 層に分かれ、南から北に落ちるように堆積していた。堀の肩口は検出できなかったが、1 Tr のすぐ南に肩口があると考えられる。下長者町通の北端付近まで濠が存在する。聚楽第跡 3 次、33 次調査成果を裏付ける成果である。

3) C 地点

調査日：2009 年 9 月 3 日

住所：上京区下長者町通智恵光院東入西辰巳町 108 番の一部

成果： 2 箇所の調査区を設定した結果、GL - 1.0m で地山を検出するとともに、調査区の大半で聚楽土を採取した土壌を検出した。聚楽土を採取した土壌は、濠の肩口と異なり、オーバーハングした断面を示している（土壌の壁が抉れている）。

4) D 地点

調査日：2009 年 11 月 4 日

住所：上京区中立売通大宮上糸屋町 198 他

成果： 聚楽第本丸東濠の堆積を確認。試掘調査では GL - 2.2m までの掘削で止められたが、ボーリング調査により、現在の地表面から 8.5m 下まで軟弱な盛土であることが判明した。

5) E 地点

調査日：2009 年 7 月 3 日

住所：上京区分銅町 560 他

成果： 聚楽第外郭南濠の南肩口を検出した。敷地境界から北に約 2.4 の地点で北に傾斜する濠の肩口を検出した。堀の埋土は、南から北に堆積する帯状の下層埋土と、土壌を含む不規則な上層埋土に分かれる。下層埋土には近世初頭の遺物が含まれる一方、上層埋土には近世でも比較的新しい様相の土器が出土する。

6) F 地点

調査日：2009 年 5 月 20 日～6 月 26 日

住所：上京区下立売通日暮西入中村町 543 他

成果： 地表下 3 m を越える土壌群が検出され、当初濠の埋土と考えられたが、調査の進展により、聚楽土を採取した土壌が集中していたことがわかった。C 地点と同様、土壌の断面はオーバーハングしており、濠の肩口付近の断面とは形状が異なる。

7) 2009 年度の調査成果のまとめ

濠の肩口の位置及び、濠が存在しない位置は、馬瀬が 2009 年 3 月に公表した復元案と矛盾するものではなかった。最大の成果は、本丸北濠の南肩口の検出と、外郭南濠の南肩口の検出であり、本丸については東西南北全てで肩口が検出されたことになる。外郭南濠（智恵光院通よりも東側）についてもその位置がほぼ特定されたことを示している。

4 『駒井日記』と調査成果

前章及び過去の調査成果と『駒井日記』の記録を比較すると、

1) 駒井日記のとおり、聚楽第内郭は、本丸、南二之丸、西之丸、北之丸の 4 郭で構成されることがわかった。

2) 駒井日記の本丸の石垣之上壁之廻間数（486 間＝約 948m）、調査成果から見た本丸の濠の内法の延長距離は約 1130m であり、『駒井日記』の記載の 1.19 倍の長さとなる。

3) 駒井日記の南二之丸の石垣之上壁之廻間数（184 間＝約 359m）、調査成果から見た南二之丸の濠の内法の延長距離は約 430m であり、『駒井日記』の記載の 1.19 倍の長さとなる。

4) 駒井日記の西之丸の石垣之上壁之廻間数（130 間＝約 254m）、調査成果から見た西之丸の濠の内法の延長距離は約 276m であり、『駒井日記』の記載の 1.08 倍の長さとなる。

5) 駒井日記の北之丸の石垣之上壁之廻間数（192 間＝約 374m）、調査成果から見た北之丸の濠の内法の延長距離は約 352m であり、『駒井日記』の記載の 0.94 倍の長さとなる。北之丸の東西両端の濠はいまだ検出されていないことから、今後調査が進めば、図 2 の破線のような修正範囲になる可能性可能性が高い。

5 京における豊臣秀吉の築城活動

天正 10 年（1582）7 月 下京六条の城（六条本國寺）造営

天正 10 年（1582）7 月 山崎城（宝寺城）造営開始【天守有】

天正 11 年（1583）3 月 妙顕寺城 造営開始【天守、外堀有】

天正 13 年（1585）7 月 秀吉、従一位・関白となる。

天正 14 年（1586）2 月 聚楽第（内野御構）普請開始

天正 15 年（1587）2 月 聚楽第（内野御構）竣工

天正 16 年（1588）4 月 後陽成天皇の行幸

天正 17 年（1589）茶々の産所として、淀城修築

天正 18 年（1590）京中町割りの実施

天正 19 年（1591）閏正月 京中屋敷替え、寺町・寺之内造営

天正 19 年（1591）閏正月 洛中惣構（御土居）築造開始

天正 19 年（1591）12 月 豊臣秀次、関白就任、聚楽第譲渡

文禄元年（1592）8 月 伏見城築城開始

文禄 2 年（1593）閏 9 月 伏見城への太閤の移徙

文禄 4 年（1595）7 月 秀次失脚に伴い、聚楽第破却される。

以上、ほぼ毎年のように秀吉は京とその周辺に築城行為を行っている。また、洛中惣構とも京之惣廻土居とも呼ばれた御土居は、現在までその築造目的について、様々な解釈がなされているが、聚楽第を築城し、町割りや京中屋敷替え等、寺町・寺之内の建設等の都市再整備と御土居の築造が連動していることは明らかであることから、聚楽第（政庁）を中心とした文字通の惣構（惣廻土居）であると考えられる。

参考文献

- 家原圭太 「平安宮主殿寮跡・左近衛府跡・南所跡, 聚楽第跡 No.20・27・30」『京都市内京都市内意試掘調査報告 平成21年度』(京都市文化市民局 2010年 3～8頁)
- 馬瀬智光 「平安宮跡・聚楽第跡 No.27, No.60」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成9年度』(京都市文化市民局 1998年 5～13頁)
- 馬瀬智光 「聚楽第跡の復元ー考古学的考察ー」『古代文化』第57巻第2号(財団法人古代学協会 2005年)
- 馬瀬智光 「平安宮職御曹司跡・梨本跡, 聚楽第跡 No.1・30」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』(京都市文化市民局 2009年 3～9頁)
- 平尾政幸 「平安宮左近衛府・侍従所」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成21年度』(京都市文化市民局 2010年 19～48頁)
- 森島康雄 「天下人の政庁(聚楽第)」『京都府埋蔵文化財情報』第111号(財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2010 32頁)
- 森島康雄 「聚楽第と城下町」『豊臣秀吉と京都ー聚楽第・御土居と伏見城』(日本史研究会編 文理閣 2001年 120～134頁)
- 森島康雄 「平安京跡(聚楽第跡)発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第54冊(財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993年 119～152頁)

補遺 御土居について

1 御土居の呼称

- 吉田兼見『兼見卿記』天正19年正月18日「山城堤」
- 西洞院時慶(にしのとくいんときよし)『時慶卿記』天正19年2月23日「京廻ノ堤」
天正19年5月18日「堤」
- 大納言勧修寺晴豊(かじゅうじはれとよ)『晴豊記』天正19年2月2日「京中惣ほり」
- 浅野長政発滝川忠征(たきがわただゆき)宛書状 天正19年4月25日「洛中惣構御普請」
仍て上様去んぬる七日大津に至り、御成ならせらるの由御知り、畏れ存じ候、次に洛中惣構御普請之儀、大略出来候由弥重候、并に政宗築地普請之事、左京大夫油断無く申し付け候由、条々念を入れられ示し給い、祝着せしめ候、此表之儀相替わる事これなく候、
(中略)

浅野弾正少弼

卯月廿五日
瀧川彦次郎殿
御返報

- 駒井重勝『駒井日記』文禄4年4月朔日条、4月2日条「京惣堀」、「京惣廻土居」、「京之惣廻土居」
 - 『京都町触集成』元禄8年(1695)9月18日「京廻御土居内」
- 以上の事例において、注目すべきは、豊臣政権の五奉行にもなる浅野長政が御土居の現場監督を務める滝川忠征に宛てた手紙である。そこには、「洛中惣構御普請」とある。
- 「洛中惣構」は文字どおり、洛中の最外郭を限る堀と土塁を意味するのではないかと考えることができる。さらに、鳥羽正雄の『日本城郭辞典』によると、「総構」は「城の郭が幾重もある場合、最も外側の郭をいう。総曲輪と同じ。総側、またあて字で総河、総川などとも書いた場合がある。この文字を総ての構とも解し得るところから、大坂冬の陣の時、大坂城の三の丸はもちろん、二の丸まで埋め立てた事件が起こったのである。」とあり、第一義的には最も外側の曲輪となる。最も外側があるのであれば、主郭(本丸)、二の曲輪(二ノ丸)に相当する部分が意識されていた可能性がある。

2 洛中惣構(御土居)の規模と構造

京都の有力寺社や諸大名に対して、洛中惣構を築造するために大規模な動員をかけている。全長22.5kmにも達する土居と堀を2箇月から4箇月で造り上げており、数万人規模の人々が従事したと考えられる。実際、吉田兼見の日記である『兼見卿記』には、「南表の普請には数万の人が工事をしている。」との記述がある。他の有名な惣構と規模を比較すると、その巨大さがわかる。また、残りの良い大宮土居町の御土居では、土塁部分の頂上部の幅が4m、下端の幅が8mあり、堀も6m～8mある。

- 洛中惣構(御土居) 南北約8km, 東西約3km, 全長約22.5km
- 山科本願寺跡 南北約900m, 東西500m, 全周2975m(約3km) 1532年落城
- 小田原城跡 外郭(総構) 延長約9km
- 京の七口
伏見口・五条口(現在の五条通)、大原口(現在の今出川通)、
荒神口(北白川から山中越えに通じる街道の口)、鞍馬口(鞍馬街道／鞍馬口通)
粟田口・三条口(東海道・東山道)、東寺口(西国街道や鳥羽街道に通じる)
丹波口(現在の七条通で、西国街道に繋がる)、長坂口(周山街道)

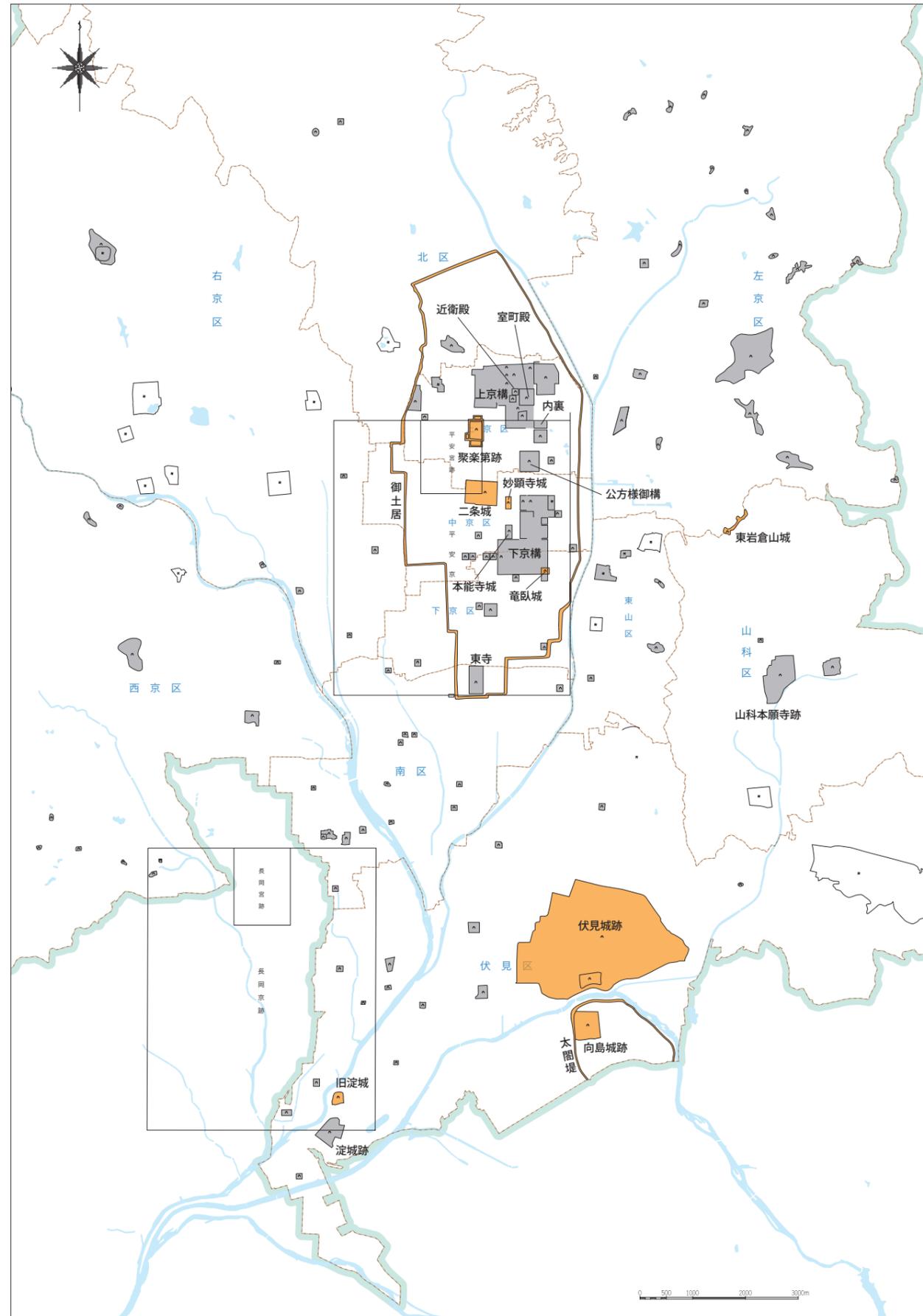


図1 秀吉関連城郭分布図

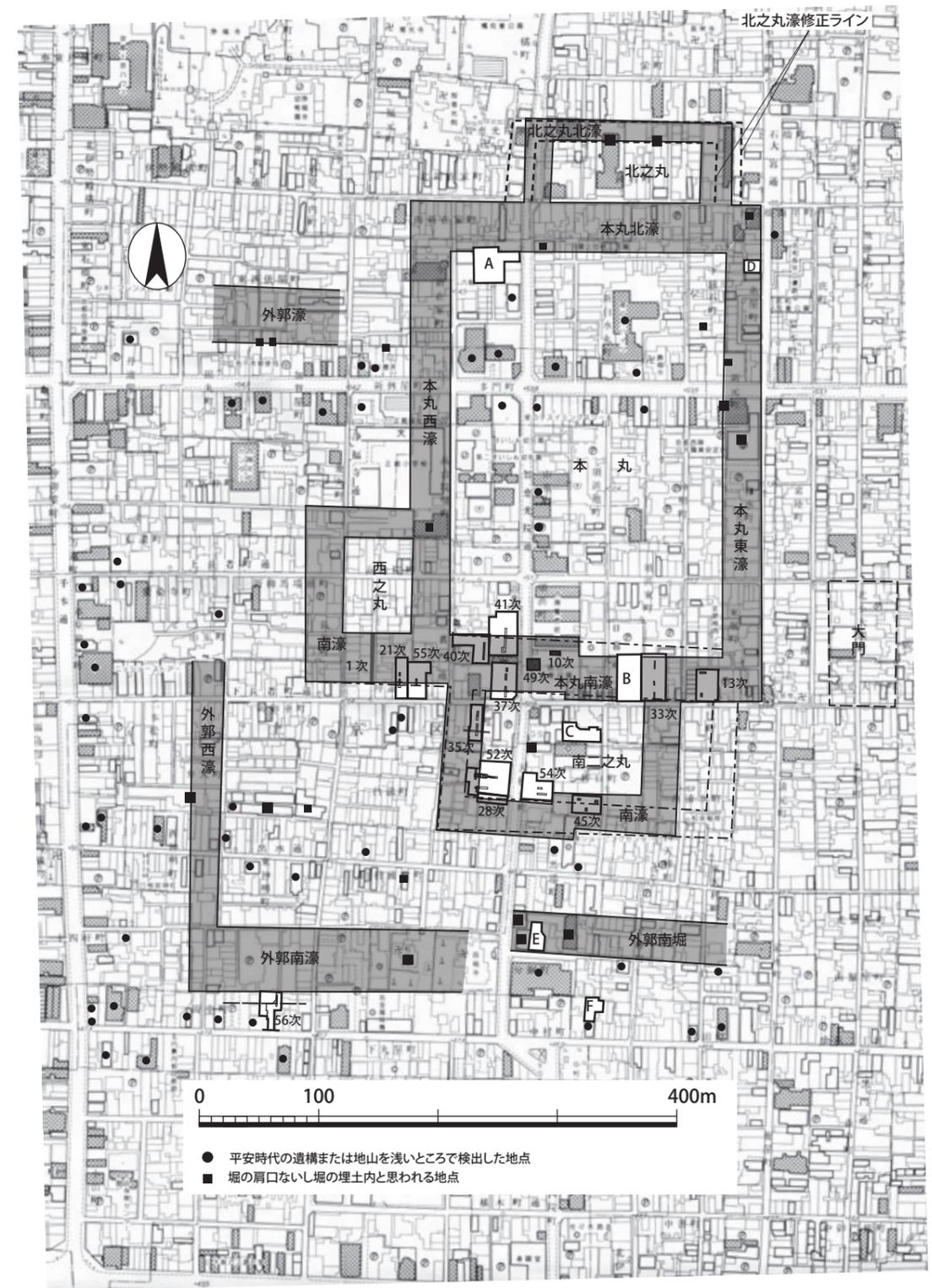


図2 聚楽第跡調査地点及び復元図(S=1/5,000)

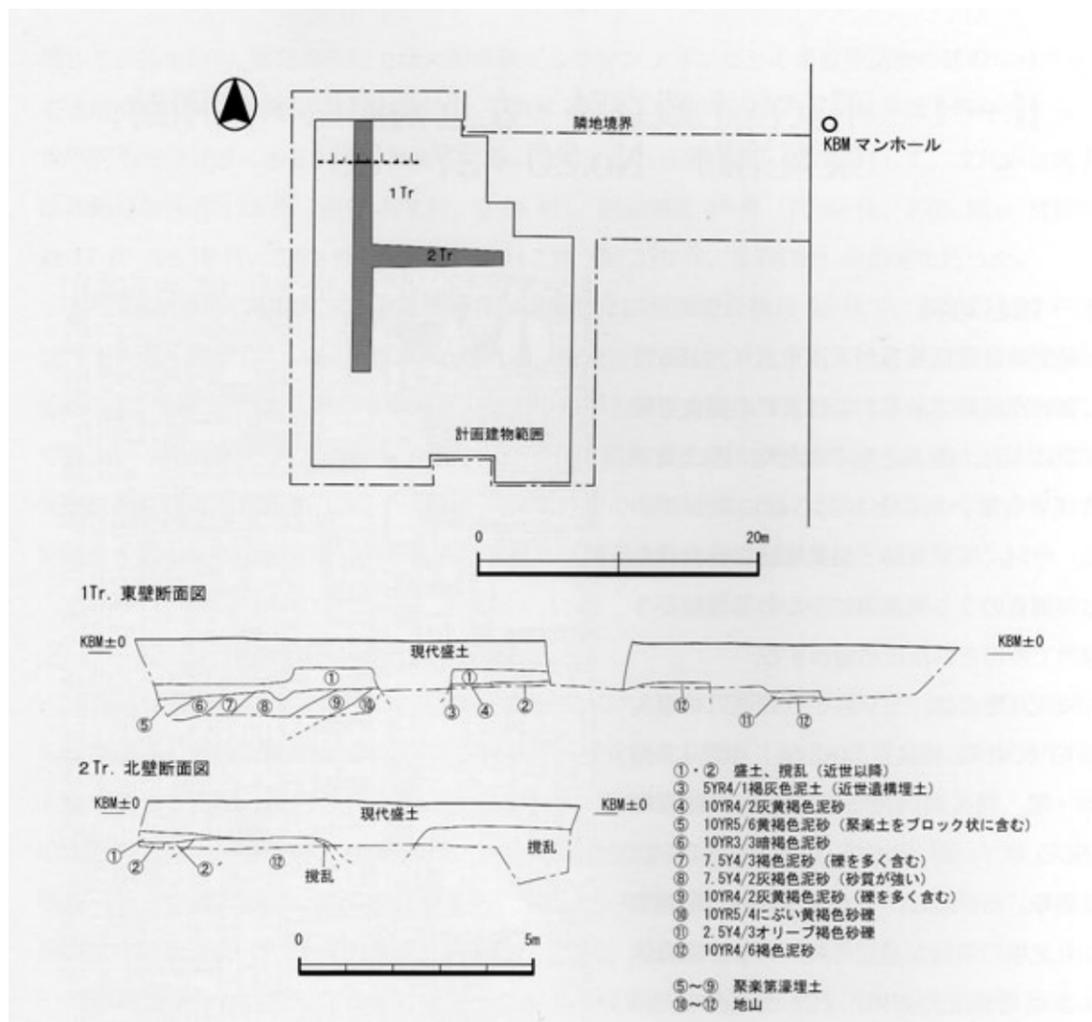


図3 聚楽第跡 A 地点 調査区配置図 (1:500)・断面図 (1:150)

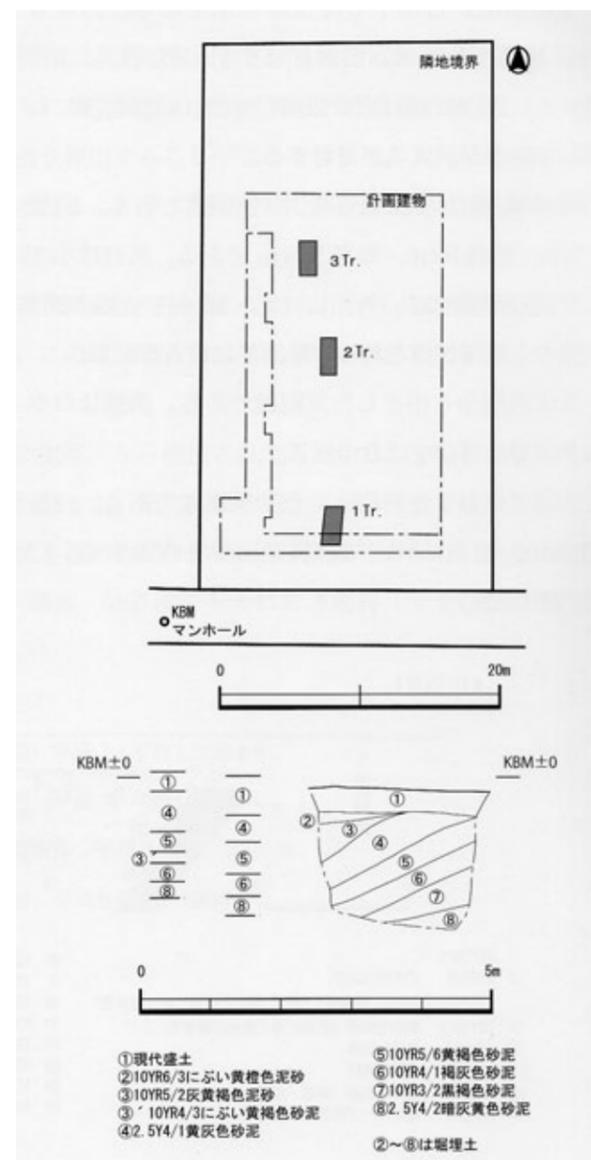


図4 (左図) 聚楽第跡 B 地点 調査区配置図 (1:500)・断面図 (1:100)

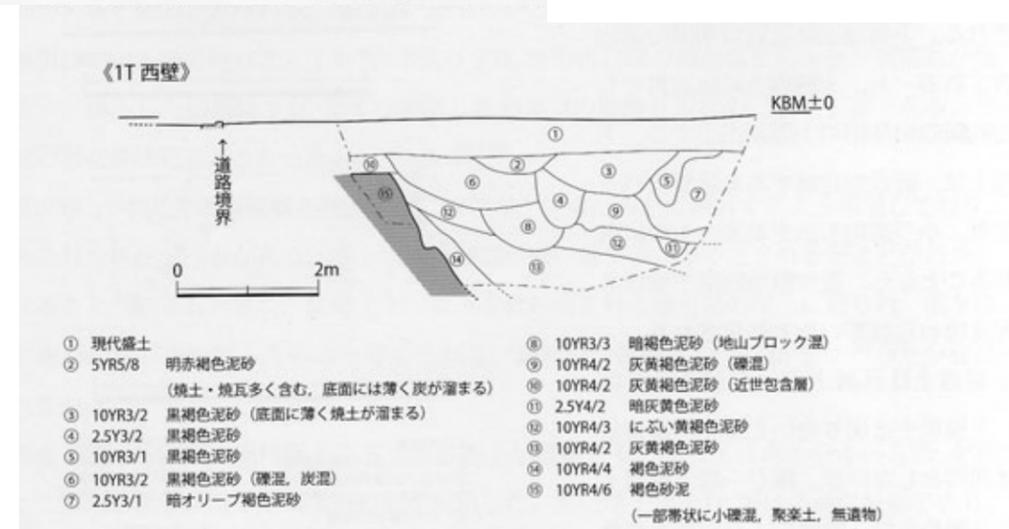


図5 (中央右図・下図) 聚楽第跡 E 地点 調査区配置図 (1:500)・断面図 (1:100)

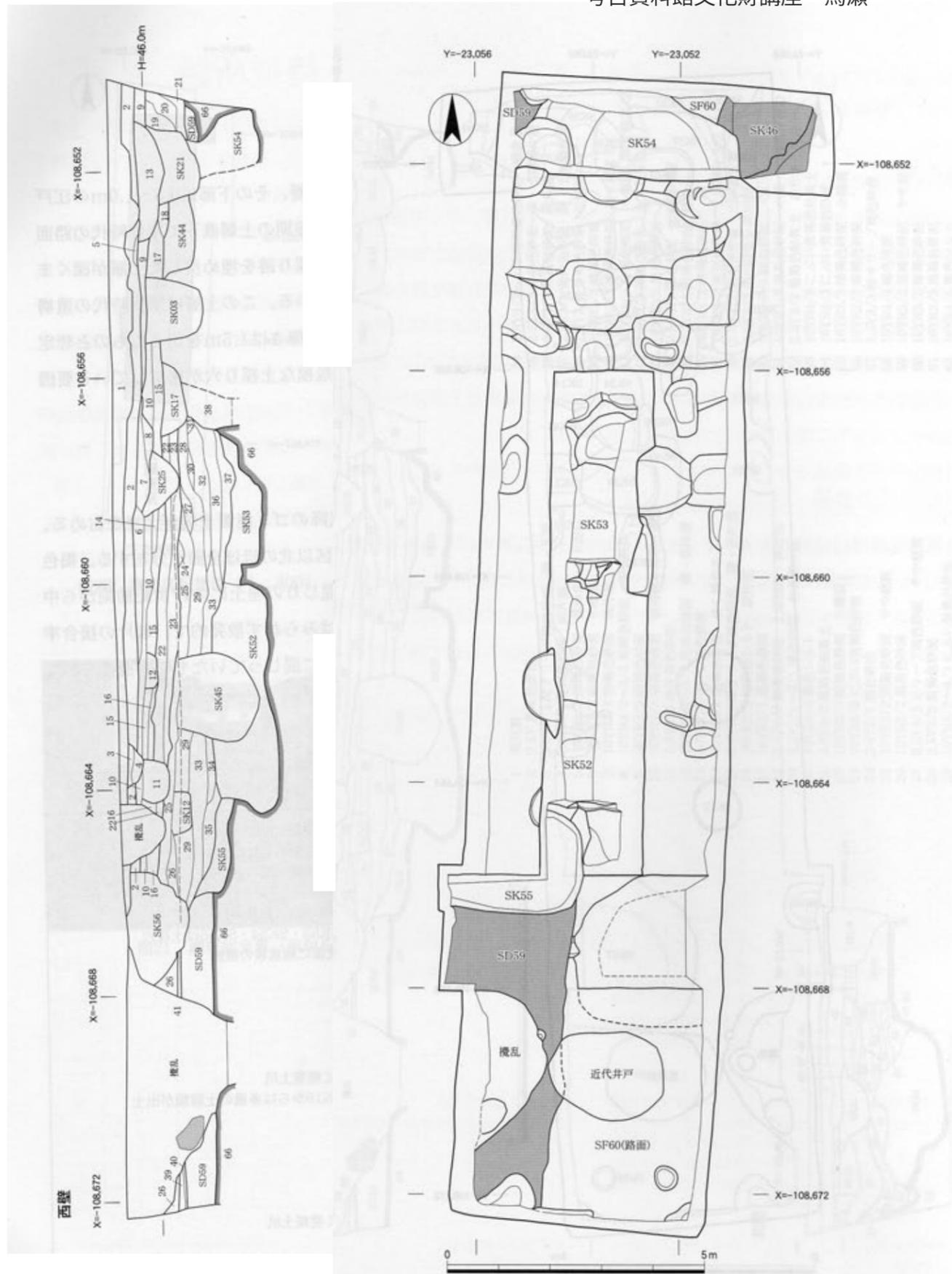


図6 聚楽第跡 F 地点調査区平面図 (1:100)・断面図 (1:100)

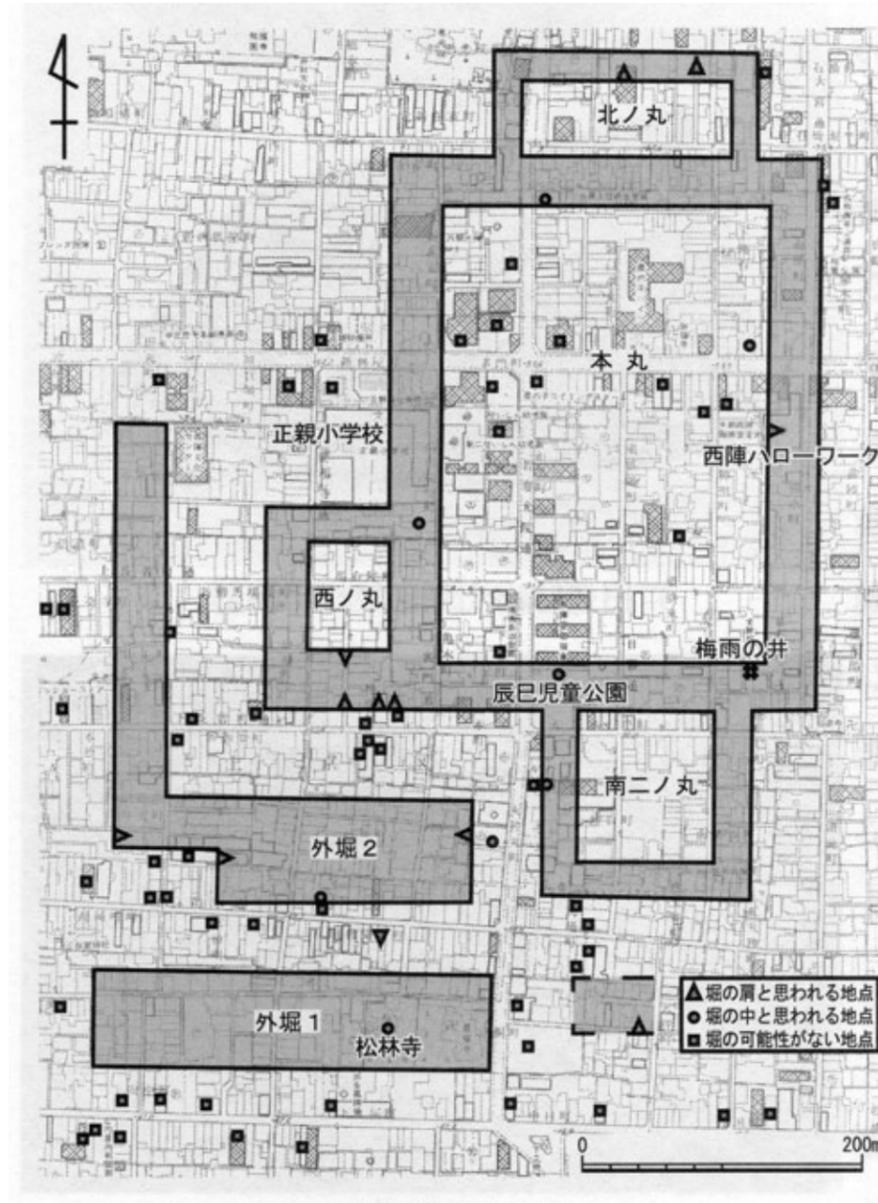


図7 聚楽第跡復元図 (S=1/5,000) (森島案 2010)